

皇朝畧史

二之上

T1A3
26
Ka72



笠間益三編輯

版權所有
皇朝略史

明治廿九年九月十日

文部省檢定濟
品落堂藏版

皇朝略史卷二目次

第六編

幕府ノ創立

頼朝陸奥ノ平グ

鎌倉三代將軍政子

承久ノ亂

北條氏ノ執權

蒙古ノ來寇

佛敎大ニ興ル

政治

和圖書 逆



a 1380329414 a

福岡教育大学蔵書



風俗

第七編

後醍醐天皇

正成赤坂ノ城守

正成金剛山ヲ守ル

新田義貞歸順ス 和長

足利尊氏歸順ス

北條氏亡ブ

菊池氏起ル

中興ノ業衰フ

尊氏叛ス

正成湊川ノ忠死

南北朝分立ス

義貞戦死ス

後醍醐天皇崩ス

楠正行戦死ス

足利氏ノ内闕 尊氏關東ヲ鎮ス

男山ノ行在

南北朝合一

皇朝略史卷三

笠間益三編纂

第六編

幕府ノ創立

治承四年源賴朝居ヲ相模ノ鎌倉ニ定メ始テ府
ヲ立テ、東國ノ號令ス東國ノ人賴朝ヲ稱シテ
 鎌倉殿ト云ノ
 文治元年始テ公文所後改政所ヲ置キ大江廣元
 以テ別當トシ政令ヲ掌ラシメ問注所ヲ置キ三
 善康信ヲ以テ執事トシ訟獄ヲ決セシム

源賴朝
 鎌倉ヲ定メ
 公文所
 法

義經討平國

賴朝

是ノ時ニ當リテ賴朝ニ弟範賴義經ヲ遣シ義仲ヲ討チテ之ノ亡シ尋テ人平氏ヲ滅シ近畿西國皆平ラケ

賴朝人ト爲リ沈毅度量アリ然レドモ性猜忌ニシテ恩寡シ義經ノ勇武ヲ忌ミ既ニ大功ヲ立ルト雖官ニ補ヒズ朝廷義經ノ功ヲ賞シ官位ヲ授クルニ及ブ益之ヲ忌ム義經モ亦其功ヲ恃ミ其ノ西海ニ在ルヤ頗ル賴朝ノ指麾ニ從ハサルトアリ又權原景時義經ヲ惡ミテ之ヲ賴朝ニ讒人。是ニ於テ義經平宗盛等ヲ以テ東ニ至ルト

鎌倉ニ入ルノ許リバ復宗盛等ノ以テ京師

送ラシム義經大ニ憤リテ西ス

義經討平國

義經既ニ京師ニ至レバ叔父行家モ亦賴朝ト隙アリテ來テ此ニ在リ義經因テ密ニ往來人賴朝ノ聞テ大ニ怒リ土佐房昌俊ヲ遣シテ義經ノ弟ヲ襲ハシム義經却テ之ヲ殺シ後白河法皇ニ直リテ賴朝ヲ討スルノ院宣ヲ請フ法皇之ヲ許ス

賴朝報ヲ得テ親カラ兵ヲ帥ヒ西上シ黃瀬河ニ至レバ義經等ノ西海ニ赴ルヲ聞ク乃兵ヲ還ス

義經海上大風ニ遇ヒ。進ムコト能ハズ。退キ走リ
吉野山ニ入ル。

賴朝法皇已レヲ討スルノ院宣ヲ下スヲ以テ。怨
訴シテ已マズ。法皇俄ニ又義經ヲ討スルノ院宣
ヲ賴朝ニ下シ。急ニ諸國ニ令シテ。義經ヲ索メシ
ム。賴朝大江廣元ノ議ヲ用ヒ。奏シ請フテ曰。亂人
逃匿シテ。容易ニ捕獲ス可カラズ。請フ諸國ノ國
司ニ守護ノ置キ。莊園ニ地頭ノ置キ。以テ在所
ニ統キテ之ヲ捕ヘント。法皇之ヲ許ス。
此ニ於テ。賴朝其家人ノ功勞アルモノヲ以テ。悉

字義
地頭
ノ道

ク諸國ノ守護地頭ト爲シ。而シテ。射鎌倉ニ居リ
テ之ヲ統ム。因リテ賴朝ヲ稱シ。六十六國ノ總
追捕使ト謂フ。當時置ク所ノ守護職ハ。在時ノ追
捕使ノ如クニシテ。賴朝之ヲ總ブルヲ以テナリ。
是ニ於テ。兵食ノ權。悉ク鎌倉府ニ歸シテ。朝廷大
ニ衰フ。是レ中世時勢ノ大變遷ニシテ。是ヨリ後。
六百八十餘年ノ間。武門ノ世トハナレリ。此時紀
元千八百四十五年ナリ。

兵食
ノ權
全ク
武門
ニ歸

賴朝陸奥ヲ平ク

文治五年。此ノ時。海内大抵賴朝ニ服ヌト雖。獨藤

源氏ノ世トハナレリ

三

秀衡

原秀衡鎮守府將軍兼陸奥守トナリテ。未ダ從ハズ。初メ賴朝ノ兵ヲ起ストキ。清盛秀衡ニ命ジテ兵ヲ發シテ。賴朝ヲ伐タシム。秀衡出デズ。又賴朝ニモ從ハホシテ。一方ニ割據シタリ。此ニ至リ。義經逃レ來リテ。秀衡ニ依ル。秀衡大ニ喜ビ。義經ヲ衣川ノ館ニ居ラシム。既ニシテ秀衡死ス。子泰衡ニ遺言シテ。義經ヲ將トシ。專ラ其指麾ヲ奉セシム。賴朝。義經ガ泰衡ノ所ニ在ルヲ聞キ。泰衡ヲ懼ラ。義經ヲ殺サシメ。ニコトヲ言フ。泰衡在朝ヲ懼レテ。終ニ義經ヲ衣川ノ館ニ襲フ。義經死シテ

衣川

奥羽

時ニ年三十一ニ或ハス。義經ハ衣川死セズ。遁レテ蝦夷ニ入レリト。其レ或ハ然ラン。既ニシテ賴朝奏シ請フテ曰。泰衡久シク義經ヲ容匿ス。臣願クハ勅ヲ奉ジテ其罪ヲ討セニ。賴朝ノ意固ヨリ義經ニ在ラズシテ。海内ヲ統一スルニアリ。朝議未ダ許サズ。賴朝大ニ兵ヲ發シテ。泰衡ヲ討ナ。三道ヨリ並ビ進ミ。連戰皆大ニ之ヲ破ル。泰衡將ニ蝦夷ニ走ラントス。其下ノ殺ス所トナレリ。是ニ於テ。奥羽悉ク平ク。乃葛西清重ヲ留メテ。百姓ヲ鎮撫ヒシム。其治法一ニ秀衡ノ約

月谷ノ人

象ノ如クセシム人皆悦服ス。時ニ紀元千八百四十九年ナリ。

鎌倉三代將軍政子

賴朝既ニ海内ヲ一統シテ。後權大納言右近衛大將ニ任セラレ。大切田一百町ヲ賜ハル。尋キテ征夷大將軍ノ職ニ任ズ。征夷將軍トハ。元ト蝦夷ヲ征討スルノ職ナリシガ。賴朝以後ハ。永ク武將ノ海内ヲ治ムル號トナレリ。

建久四年。賴朝富士野一職ス。關東ノ將士多ク從フ。此ノ時伊東祐親ノ一孤曾我祐成及弟時致工

勝能經ヲ襲テ力之ノ殺

シ。以テ父ノ仇ヲ復ス祐

成ハ鬪ヒ死シ。時致ハ捕

ヘテレテ斬ラル。時ニ鎌

倉誰言ス。賴朝害ニ遭ノ

ト。夫人政子驚ト泣ク。範

賴慰メテ曰。範賴此ニ在

リ。憂トスル勿レト。後賴

朝之ヲ聞テ。範賴ヲ惡シ

遂ニ伊豆ニ放テ。後兵ヲ



皇朝田中 卷之三

遣シテ之ヲ殺ス。

正治元年、賴朝薨ス。年五十三。賴朝始テ兵ヲ起セシメテ、六年ニシテ平氏ヲ滅シ、兵馬ノ權ヲ執ルコト。此ニ至ルマデ、十五年ナリ。

北條時政

賴朝伊豆ニ流サレ、北條時政ニ依リ、後其女ヲ納レテ妻トス。即チ政子是ナリ。政子、賴家實朝及二女ヲ生ム。賴朝薨シテ、賴家繼ギテ將軍タリ。年十八、時政外祖ヲ以テ政所ノ別當タリ。大江廣元等之ニ參預ス。北條氏ノ權是ヨリ盛ナリ。賴家暗愚ナリ、長ズルニ及テ、遊宴ニ耽リ、政事ヲ

顧ミズ。政子憂之、戒ムレドモ、賴家改メズ。政子、時政ト共ニ政ヲ專決ス。

賴家疾ム。政子其瘡ユ可カラザルヲ度リ、賴家ヨシテ、關東關西ノ地頭ヲ兩分シテ、賴家ノ子一幡ト。其弟千幡トニ授ケシメ、シト欲シ、處分既ニ定マル。一幡ノ外祖北條能員、千幡ヲ殺シ、北條氏ヲ滅シ、自リヲ權ヲ專ラニセント欲シテ、之ヲ賴家ニ勸ム。賴家乃能員ヲ召シテ密議ス。

政子其謀ヲ聞テ、急ニ時政ニ告グ。時政謀リテ能員ヲ殺シ、併セテ一幡ヲ殺ス。賴家大ニ怒リ、時政

ヲ誅セントス。時政政子ヲシテ賴家ニ迫リ。髮ヲ
削ラシメ。之ヲ伊豆ニ幽シ。千幡ヲ立テ、職ヲ繼
ガシム。是ヲ實朝トス。此ニ於テ。北條氏ノ威權益
盛ナリ。後時政竊ニ人ヲ遣ハシテ賴家ヲ殺サシ
ム。

實朝既ニ職ヲ繼ギテ。時政ノ弟ニ在リ。時政ノ後
裔牧氏時政ニ勸メ。實朝ヲ除キ。源朝雅ヲ立テ、
將軍ト爲シ。コトヲ圖ル。朝雅ハ其女婿ナリ。既ニ
シテ事覺ハル。政子。實朝ヲ義時ノ弟ニ移シ。時政
ヲ伊豆ニ徙シ。義時ヲシテ執權タラシム。執權ト

ハ。鎌倉ノ長官將軍ニ代リテ。政ヲ執ルノ職有リ。
北條氏ノ執權ハ。義時ヨリ始マル。義時ハ。時政
ノ子ニシテ。政子ノ兄ナリ。

初メ賴家ノ難ニ及ブヤ。其子公曉猶幼ナリ。避テ
テ京師ニアリ。長ズルニ及テ。政子迎ヘテ鶴岡ノ
別當ニ補ス。常ニ實朝及義時ヲ殺シ。以テ父ノ讎
ヲ復セント欲ス。後實朝右大臣ニ任シ。拜禮ヲ鶴
岡ニ行フニ方リ。公曉暗ニ乘ジテ實朝ヲ害ス。公
曉モ亦三浦氏ノ爲メニ殺サレ。源氏ノ正統此ニ
至リテ絶ツ。世ニ賴朝賴家實朝ヲ稱シテ。三代將

軍ト謂フ。

鎌倉ニ主ナキヲ以テ。政子。義時ト議シ。奏シテ皇
子ヲ擇ビテ。將軍ト爲ント請フ。朝議許サズ。乃チ
攝政藤原道家ノ子賴經ヲ迎テ立テ、鎌倉ノ主
トス。後將軍ニ任ズ。此ノ時甫メテ三歳。政子政ヲ
管内ニ聽キ。義時執權タリ。是ヨリ。大權全ク北條
氏ニ歸シテ。賴朝ノ業モ亦衰フ。時ニ紀元一千八
百七十九年ナリ。

嘉祿元年。政子薨ル。年六十九。政子政ヲ聽クコト
七年。世ニ尼將軍ト稱ス。又位三位ニ登リシヲ以
テ故一亦一位尼トモ謂フ。

承久ノ亂

仲恭天皇承久二年。初。後鳥羽上皇源氏ノ兵權ヲ
專ラニスルヲ憤リ。常ニ鎌倉ヲ討スルノ志アリ。
實朝ノ害ニ遭フテ。源氏ノ統絶ユルニ及ビ。以爲
テク。威權復スベシト。而シテ北條氏陪臣ヲ以テ。
代リテ其權ヲ執ルコト故ノ如シ。上皇益不平ナ
リ。後又義時鷹救ヲ奉セザルコトアリシカバ。上
皇大ニ怒リ。意ヲ決シテ北條氏ヲ討セント近
畿ノ兵ヲ集メ。義時ノ官位ヲ奪ヒ。密ニ人ヲ馳セ。

源氏ノ亂

北條氏ノ亂

泰時
京師
紀師

詔ヲ持シテ關東ノ諸豪ニ諭ス。

義時詔書ノ奪ヲテ之ヲ燒キ諸將ヲ會シテ議ヲ決シ遂ニ反シ子泰時朝時弟時房等ヲシテ兵十萬ヲ帥ヒ東海東山北陸三道ヨリ並ビ進テ京師ヲ犯サシム。

上皇諸將ヲ遣シ兵一萬七千餘ヲ發シテ美濃尾張及越前ニ屯シ諸道ノ賊軍ヲ拒ガシム皆敗レ歸リ泰時等直ニ京師ニ入ル。

上皇懼レテ泰時ニ諭シテ曰此舉朕ノ意ニ出ルニ非ズ皆臣僚ハ爲ル所ト罪ヲ權大納言藤

原忠信以下六人ニ歸ス泰時乃リ六人ヲ拘シテ

鎌倉ニ送り途ニシテ之ヲ殺ス泰時義時ノ命ヲ

以テ帝ヲ廢シ後鳥羽上皇ヲ隱岐ニ徙シ土御門

上皇ヲ上佐ニ順徳上皇ヲ佐渡ニ遷ス是ヲ承ク

ノ亂ト云フ高倉帝ノ孫茂仁親王ヲ立ツ是ヲ後

堀河天皇トス。

北條氏ノ執權

源氏起リシヨリ朝廷ノ權大ニ衰ヘシト雖朝

ノ命令未タ余ヲ行ハレガルニハ至ラガリシニ

承久ノ亂ニ於テ義時三上皇ヲ遠國ニ流セシヨ

始テ
六波羅
置

リ以後ハ天子ノ廢立大臣ノ進退ヨリ其繼ノ事
ニ至ルマデ大權一ニ北條氏ノ手ニ歸シタリ而
シテ義時府ヲ京師ノ六波羅ニ置キ常ニ其族ヲ
遣シテ此ニ居ラシム京畿ノ政ヲ裁決セシム既
ニシテ義時其近臣ノ刺シ殺ス所ト爲リテ死ス
泰時繼キテ執權職トナル

泰時人ト爲リ寛厚謙謹ニシテ識量アリ能ク治

體ニ明ラケニシテ嘗テ貞永式目五十條ヲ定ム

テ政ヲ聽キ獄ヲ斷ムルノ資ニ供ス而シテ自々

ラ清廉節儉ヲ行ハテ下ヲ恤ム職ニ在ルコト十

泰時
卒ス

八年國中能ク治マル其卒スルニ及ヒ貴賤之ヲ

悲ムコト父母ニ喪ムルガ如シ子時氏先チテ死

シタルヲ以テ孫經時繼テ執權職タリ

經時大將軍賴經ヲ廢シ其子賴嗣ヲ立テ、將軍

タラシム甫メテ六歳ナリ經時病ミテ職ヲ弟時

賴ニ讓ル既ニシテ經時卒ス時賴ノ從父光時前

將軍賴經ニ寵セラレ密ニ時賴ヲ除キテ執權タ

ランコトヲ賴經ニ謀ル既ニシテ事露ハル時賴

乃チ賴經ヲ京師ニ送還シ光時ヲ伊豆ニ放ツ

後又三浦義村兄弟モ亦北條氏ヲ滅シ前將軍賴

經ヲ迎ヘントシテ兵ヲ起シ時頼ノ伐ヲ滅ス所
 トナル。頼經モ亦時頼ニ廢セラル、ヲ憤リ。密ニ
 兵ヲ集メテ以テ北條氏ヲ謀ル。將軍頼嗣亦違ニ
 其謀ニ與カル。時頼之ヲ知リ、頼經ノ黨ヲ捕ヘテ
 之ヲ斬リ、頼嗣ヲ廢シテ、亦京師ニ送還シ。後嵯峨天皇
 ノ皇子宗尊親王ヲ迎ヘテ、鎌倉ノ主トス。尋テ大
 將軍トナル。

時頼

藤綱

時頼銳意治ヲ圖リ。海内能ク治マル。又青砥藤綱
 ヲ用ヒテ訟ヲ司ラシム。藤綱人トナリ廉平ニシ
 テ、斷獄私ナク、風俗大ニ革マル。

時頼疾ニヨリテ髮ヲ削リ、其建ル所ノ最明寺ニ
 退居シテ、疾ヲ養フ。子時宗猶幼ナリ、故ニ族長時
 ヲシテ、執權職ヲ攝セシム。國家ノ大事ハ、自カラ
 之ヲ決ス。

時頼

時頼意ヲ政治ニ用ヒ、職ヲ解クノ後ト雖、自カラ
 僧服ヲ着ケテ、四方ヲ巡リ、風俗ヲ察シ、民ノ疾苦
 ヲ問フ。是ニ由リテ、地方ノ吏、自カラ勵ミ、風化大
 ニ行ハル。年三十七ニシテ卒ス。親疎トナク、悲哀
 セザルハナシ。

長時職ヲ罷メテ、同族政村執權ヲ攝ス。數年ニシ

テ時宗執權トナル。此時僧良基等將軍宗尊親王ニ親近シテ、竊ニ黨ヲ集メ、北條氏ヲ滅サンコトヲ圖ル。既ニシテ事泄ル。宗尊親王實ハ與リ知ラザレドモ、時宗宗尊ノ將軍職ヲ廢シテ、京師ニ送還シ、其子惟康ヲ立テ、將軍トス。時ニ甫メテ三歳ナリ。

時宗人ト爲リ果決ニシテ膽略アリ、蒙古ヲ西海ニ撃チ却クテ、大ニ國威ヲ振フ。後項蒙古來寇時宗卒シテ、子貞時繼グ。

貞時將軍惟康北條氏ヲ圖ルノ志アルト聞キ、廢

シテ京師ニ送還シ。後深草帝ノ第三子久明親王ヲ迎ヘテ、將軍トス。後又久明親王ヲ京師ニ送還シ。其子守邦ヲ立テ、將軍トス。

貞時祖父時賴ノ風ヲ慕ヒ、後僧衣ヲ着ケテ、四方ヲ遊歴シ、風俗ヲ察シ、疾苦ヲ問ヘリ。故ニ其職ニ在ルノ間、世甚ダ治平ナリ。

貞時卒シ、子高時年十四ニシテ執權タリ。高時昏狂ニシテ、遊宴ニ耽リ、奢侈ヲ極メ、政事ヲ省ミズ。内訌、浪長崎高資、政事ヲ專ラニシ。忌ニ憚ル所ナシ。泰時時賴以來、世々心ヲ政事ニ用ヒテ、國中能

貞時卒ス

クニ條ヲ七
畔氏北條

蒙ノ家
ノ心

クハハマリシガ。此ニ至リ。其政始テ衰フ。陸奥ノ人
安藤兼勢北條氏ニ畔ク。高時兵ヲ遣シ。之ヲ擊ツ
克ズ。承久以來。士ノ北條氏ニ畔クハ。此ヲ始トス。
時ニ紀元一千九百八十二年ナリ。

蒙古ノ來寇 モウコ 伊不刺人 イフサシ マルコボロ マルコボロ テイハイ

此時支那ノ國號ヲ宋ト云フ。其北方ニ蒙古國アリ。其主忽必烈ニ至リ。勢甚カシク強大ニシテ。終ニ宋ヲ滅シテ。支那ヲ併セ。國號ヲ元ト改ム。龜山天皇支永五年。忽必烈使ヲ我國ニ遣シ。好ヲ通ゼンコトヲ求ム。其意ハ。我國ノ形狀ヲ伺フナリ。

リ。時ニ。北條時宗執權タリ。其言辭無禮ナルヲ以テ。之ヲ却ス。後屢使ヲ遣ヒドモ固ク拒ミテ納ム。不。

十一年。蒙古ノ兵三萬來リテ對馬ニ寇ス。守護代宗助國防戰シテ之ニ死ス。又壹岐ニ寇ス。守護代平景隆亦戰死ス。進テ太宰府ヲ侵ス。少貳景資擊テ之ヲ破ル。賊兵夜遁ル。百餘人ヲ捕ヘテ之ヲ斬ル。

建治元年。蒙古使ヲ遣シテ和ヲ求ム。時宗之ヲ錮倉ニ斬ル。既ニシテ復使ヲ遣ス。時宗之ヲ博多ニ

九州探題ノ始

斬ル。此ニ於テ。時宗。蒙古ノ必ズ來リ寇セニユ
ヲ計リ。公私ノ費用ヲ省減シ。精兵ヲ九州ニ分遣
シ。北條實政ヲ以テ。九州探題トシ。以テ之ニ備フ。
九州探題ハ。此ニ始マル。

蒙古ノ寇ヲ破ル

弘安四年。蒙古果シテ大兵ヲ發シ。先ツ對馬壹岐
ニ寇ク。遂ニ進テ筑前ニ至リ。太宰府ヲ侵ス。實政
防戦ヲテ。之ヲ破ル。賊退テ鷹島タカシマ筑前玄界タカシマニ據
ル。七月晦夜。大風雷雨起リ。賊船皆覆没ス。我兵勢
ニ乘ジ。撃テ之ヲ殲ス。賊兵十萬ノリシガ。生キテ
還ルヒノ。僅ニ三人。是ヲ弘安蒙古ノ寇ト云ハ。是

時宗ノ果斷

ヨリ。蒙古復我國ノ寇ヲ
能ハズ。時ニ紀元一千九
百四十一年ナリ。
此時。蒙古近隣ヲ併吞シ。
其疆土ノ大ナル。宇内ニ
比類ナカリシガ。尚我國
ヲ併セント欲ス。故ニ和
スルモ。來リ寇シ。和セザ
ルモ。來リ寇ス。ハ知ルベ
シ。故ニ時宗。果斷和ヲ拒



持宗
功大

以テ我將士ノ心ヲ一致シ。遂ニ大捷ヲ奏スル
ニ至ル。時宗ノ功大ナリト謂フベシ。

佛教大ニ興ル

佛徒
勢カ
得ル

初メ、白河天皇ノ頃ヨリ。僧徒大ニ世ニ勢力ヲ得
テ、殆ド武門ノ如ク、兵仗ヲ蓄ハヘテ。互ニ相爭鬪
シ。或ハ朝命ヲ拒ミ。或ハ武門ニ抗セシムトアリ。
朝廷モ一ノ困難物ト爲サレシガ。壽永年間ニ至
リ。源賴朝。僧徒ヲシテ。其宗旨ノ學ニ就カシム。其
兵器ヲ收メタリ。此ニ於テ。僧徒ノ風大ニ變シ。專
ラ宗旨ヲ開キ。教法ヲ弘ムルコトヲ務ムル者。相

入
如
入

備中ノ僧榮西^{トナリ}初メ宋國ニ往リ。天台宗ノ學ビシ
ガ。再ヒ往リテ。禪宗ノ學ビ。賴朝ノ時歸朝シテ。其
宗ノ弘ム。是ノ際。濟宗ノ祖トス。是ニ於テ。禪宗始
テ我邦ニ入ル。

浄土
宗

美作ノ僧源空^{タカク}初メ。叡山ニ學ビ。廣ク諸宗ノ奧旨
ノ究ム。後天台宗ヨリ。更ニ浄土宗^{ミキド}ノ一派ヲ創メ
タリ。圓光大師ト號ス。源空ノ弟子親鸞^{シンラン}ハ。後更ニ
浄土宗ヨリ。一向宗^{イツウジョウ}ノ一派ヲ創メ。僧侶モ亦妻ヲ
蓄ヘ肉ヲ食フノ許ス。

一向
宗

北條時賴ノ時僧道元亦禪宗ヲ宋ニ學ビ歸朝ノ後曹洞宗ヲ開クリ北條氏ノ時ニ當リ佛教大ニ興リ中ニ就テ禪宗最モ盛ニ行ハル時賴時宗貞時皆禪ヲ崇じ時賴ハ僧祖元ヲ支那ヨリ迎ヘ時宗ニ至リテ祖元ガ爲メニ圓覺寺ヲ鎌倉ニ立リ此時ヨリ禪教大ニ海内ニ行ハル安房ノ僧日蓮モ亦此時叡山ニ學ビ天台宗ヨリ更ニ日蓮宗ヲ起ヒリ專ラ法華經ヲ奉ズルヲ以テ世ニ之ヲ法華宗トモ謂フ

政治

文治二年賴朝六十餘國ノ總追捕使トノリ幕府ヲ鎌倉ニ開トテヨリ朝廷ニ請ノテ國司領家ノ外ニ其家人ヲ以テ守護地頭トシテ諸國ヲ治メシメタリ然ルニ國司領家ハ定規ノ年限アリテ交替スルヲ以テ人民ノ推戴自カラ薄ク守護地頭ハ多ク世襲セシムル故ニ人民ノ親愛密ニシテ其勢日ニ盛ナリ遂ニ大名小名ト稱ズルニ至リテ漸ク封建ノ勢ヲナセリ總テ賴朝ハ朝廷ノ繁雜ナル制度ノ外ニ別ニ簡易ナル治法ヲ立テ政所問注所等要路ノ官吏ハ

此方
治法
之
源

蓋十餘人ニ過ヤズシテ。全國ノ政ヲ總轄シタリ。
而シテ地方ノ治法ニ至リテ。多クハ舊慣ニ依リ。
土俗民情ニ從ヒ。紛更スルコトナク。恩惠ヲ下ニ
施セリ。其陸奥ヲ平グルヤ。吏ニ命ジテ。其治法ニ
ニ秀衡ノ約束ノ如クセシム。民皆悦服ス。是其證ニ
シテ。以テ其他ヲ推測ルベシ。
北條氏執權職トナルニ至リテモ。内外ノ治法ニ
ニ賴朝ノ舊制ヲ守リ。更ニ行政司法ノ規則ヲ立
テ。武門政治ノ基ヲ固メタリ。承久ノ亂後。北條氏
京師ノ六波羅府ヲ置キ。京畿ノ政事ヲ決セシメ。

北條氏ノ謙
守ノ治
政ノ源

常ニ族人ヲシテ。交代シテ此ニ居ラシメタリ。蓋
承久ノ亂ニ懲リテナリ。
泰時以來。世々謙遜ヲ守リ。節儉ヲ務メ。意ヲ政治
ニ銳クシ。屢使ヲ遣シ。吏ノ良否ヲ察シ。民ノ利害
ヲ問フ。時賴貞時ノ如キハ。自カラ行脚僧トナリ。
地方ヲ巡リ。民間ノ景狀ヲ視察スルニ至ル。是ヲ
以テ。百餘年ノ間。海内能ク治マレリ。蓋武門ノ政
ヲスル者。前後數百年ノ間ニ於テ。自カラ政事ニ
勤勉セシハ。北條氏ニ及ブモ。アラズ。故ニ陪臣
ヲ以テ政權ヲ專ラニスト雖。民心ヲ失ハザリシ。

高時北條家ノ敗

然レドモ高時ノ昏愚ニシテ家風ヲ敗ルニ至リ
民心忽チ離レテ亡滅セリ。

風俗

頼朝常ニ節儉ヲ以テ下ヲ率ヒ痛ク累世奢侈ノ
風習ヲ改良スルコトヲ務メタリ。是ヲ以テ上朝
廷ニ於テハ遊惰奢侈ノ舊習尚存スルニモ拘ラ
ズ。下武家ニ在テハ一種儉勤質朴ノ風俗ヲ作リ
出セリ。

北條氏ノ儉約

北條氏ニ至リテ益儉約ヲ主トシタリ。下ニ記載
スル當時ノ事實ニ由リテ其他ヲ想ヒ見ルニ足

レリ。

後松平

松下禪尼ハ執權職時頼ノ母ナリ。兄義景適至ル
尼時ニ手ツクテ片紙ヲ裁シテ紙障ノ破レヲ補
ヘリ。義景曰。之ヲ補フハ之ヲ新ニスルノ勞ヲ省
クニ如カズト。尼曰。我豈之ヲ知ラザラニヤ。然レ
ドモ此物小シク破ル、アレバ宜シク之ヲ修
補スベシト。

上

時頼一夜其族父宣時ヲ招キ飲ム。宣時至レハ時
頼自カラ酒ヲ携ヘ出デ、曰。偶此物アリ。獨酌ム
ベカラズ。故ニ君ヲ迎フルナリ。唯肴ナキヲ恨ム。

願クハ君ヲ勞シテ。厨下ヲ探リ。有ル所ノ物ヲ取
ラシメント。宣時乃チ起チテ索メシニ。僅ニ殘餘
ノ豆豉ヲ得タリ。之ヲ以テ酒ヲ助ケ。相對酌シテ。
深夜ニ至リ。歡ヲ盡シテ止ム。

佛法
習俗
一部
ル

然レドモ。當時佛法盛ニ行ハレタルヲ以テ。佛法
ニ因縁シテ。習俗ト爲リシコト。亦多ク。家屋ノ構
造ヨリ。器物ノ需用品ニ至ルマデ。寺院ノ制ニ類
似シ。僧侶ノ風ニ模擬スル事アリ。且鎌倉政府ニ
於テハ。官吏ニシテ。薙髮スルモノ極メテ多ク。是
亦僧徒ノ貌ニ倣ヒタルモノナリ。此風ハ。延キテ

官吏
薙髮

足利氏ノ時代ニ及ビ。薙髮ノ將士。政府ニ滿ツル
ニ至ルコトアリ。

第七編

後醍醐天皇

後嵯峨天皇以來。常ニ北條氏ノ專權ヲ憤リ。遂ニ
之ヲ除カシコトヲ圖ル。然レドモ。未ダ機會ヲ得
ズ。後醍醐天皇ノ時ニ至リ。執權高時。政ヲ失ヒ。將
士心ヲ離ル。帝此時ニ乘ジ。之ヲ討滅セント欲シ。
資朝。源俊基。下謀リ。多ク豪傑ヲ引ク。美濃人
土岐賴兼。多治見國長。會來テ京師ニ居ル。資朝引

後醍醐
北條氏
資朝

テ同謀ト爲ニト欲シ。乃チ俊基及ビ大納言藤原
 帥賢等ト。數賴兼國長ノ延キ。深ク相結納ス。會ス
 毎ニ。皆衣冠ヲ脱シ。酒ヲ縱マシ。以テ務テ
 歡心ヲ結ブ。名ケテ無禮講ト謂フ。竟ニ計ヲ以テ
 賴兼等ニ告グ。賴兼等。心ヲ傾ケテ相謀ル。既ニシ
 テ。露ハル。六波羅府兵ヲ發シテ。賴兼國長ヲ襲
 テ。之ヲ殺ス。高時兵ヲ遣シテ。資朝俊基ヲ執ヘ。遂
 ニ廢立ヲ謀ル。帝誓書ヲ賜フテ。事釋クヲ得タリ。
 高時乃チ俊基ヲ釋シ。資朝ヲ流ス。是ヨリ帝東伐
 ヲ議スル。益々急ナリ。

高時帝ノ東伐ヲ議スルヲ知リ。内ニ俊基ヲ執ヘ。
 之ヲ鎌倉ニ送ル。高時意ヲ決シテ廢立ヲ圖リ。二
 階堂貞藤等ノ遣シ。兵三千ヲ師ヒテ。京師ヲ犯サ
 シ。帝南都ニ幸シ。遂ニ笠置山ニ幸ス。大納言藤
 原師賢。詐テ帝ト稱シ。叡山ニ赴ク。六波羅府萬人
 ヲ以テ叡山ヲ攻ム。護良親王。僧徒ヲ督シ。擊テ之
 ヲ却ク。既ニシテ。僧徒等。眞ノ天子ニ非ザルヲ知
 リ。相率ヒテ叛ト去ル。帥賢走テ行在ニ歸ス。
 帝笠置ニ在リ。詔ヲ四方ニ下ダシ。難ニ赴カシム
 而シテ。未ダ應スル者アラズ。帝之ヲ憂フ。一夜夢

人。紫宸殿ノ前一。大樹アリテ。南枝最モ茂シ。樹
下ニ御座ヲ設ケ。二童子涙ヲ垂レテ曰。天
下。地ノ陛下ヲ容ル。ナシ。唯此座アルノミト。帝
覺メテ之ヲ異トシ。自カラ思フ。未。南ニ從フハ。捕
ノ字ナリ。蓋楠ヲ氏トスルモノ。出テ。朕ヲ助ク
ルナラント。卽山僧ヲ召シテ。之ヲ問フ。對テ曰。金
剛山ノ西ニ楠正成ト云フモノアリ。勇武ヲ以テ
名アリト。帝曰。是ナリ。卽藤原藤房ヲシテ。之ヲ召
サシム。正成行在ニ至ル。帝大ニ喜ブ。委スルニ興
復ヲ以テ人止成詔ヲ奉シ。歸テ赤坂ニ城ヲ勤王

ノ兵ヲ擧グ。正成ハ。敏達帝ノ曾孫攝諸兄イハレノ後イハレナリ。

高時。皇太子ヲ奉ジテ。帝ヲ稱セシム。是ヲ光嚴帝
トス。兵ヲ遣シテ笠置ヲ圍ム。城固フシテ拔ケズ。
高時。大佛負直。足利尊氏等ヲ遣シ。大兵ヲ將ヒテ
西上ヒシム。未ダ至ラズシテ。笠置終ニ陷ル。帝逃
ル。獨リ藤原藤房ツク從フ。扶ケ行ク。ト三日。將ニ赤
坂ニ幸ヒントス。途ニシテ。追兵。帝ヲ執ヘテ六波
羅ニ徙ス。賊將。神器ヲ新帝ニ傳ヘニコトヲ請フ。
帝許サズ。高時。遂ニ帝ヲ隱岐ニ徙ス。獺源忠顯宮

皇朝通志卷之三

人藤原氏從フ。

車駕備前ヲ過ク。兒島高

德兵ヲ起シ。車駕ヲ奪シ。

奉ジテ以テ賊ヲ討ヒシ

ト欲ス。事成ラズ。衆皆散

ジ去ル。高德夜竊ニ帝ノ

館ニ入ル。庭ニ一櫻樹ア

リ。乃チ斫リテ之ヲ白シ。

詩ヲ書テ曰。天莫空句踐。

時非無范蠡。帝之ヲ見テ。



心竊ニ喜ズ。帝隱岐ニ至ル。高時其守佐々木清高

ヲシテ。兵ヲ以テ監護セシム。諸皇子及。藤原以

下公卿六人ヲ流シ。俊基等四人ヲ殺ス。獨藤原親

王。逃テ吉野ニ走ル。此ニ於テ。四方勤王ノ帥益衰

ス。時ニ元弘元年。紀元一千九百九十一年ナリ。

正成赤坂ノ城守

正成ノ赤坂ニ城ヲヤ。守備未タ完カラズ。兵僅ニ

五百。笠置既ニ陷ル。賊兵勢ニ乘ジテ大ニ至ル。兵

總テ三十萬。城小ナルヲ見テ之ヲ侮リ攻ムルコ

ト甚ク急ナリ。正成奇策ヲ用中テ。屢賊ヲ破ル。賊

正成
赤坂
守

高時
高徳

正成奇策ヲ用中テ屢賊ヲ破ル

廿二

頗ル沮ム乃チ退テ營柵ヲ守リ持久ノ計ヲ爲ス
而シテ城中僅ニ數日ノ食ヲ餘ス正成衆ニ謂テ
曰忠臣國ニ殉スルハ固ヨリ其分然レドモ天子
在リ吾未知死ス可カラズ吾今佯リ死セバ賊必
ズ引歸ラン歸レバ則チ復起リ賊ヲシテ奔命ニ
疲レシメン是勝ヲ制スルノ道ナリト乃チ坑ヲ
掘リ屍ヲ填メ薪ヲ以テ之ヲ蔽ヒ一卒ヲ留メテ
火ヲ舉ゲニム夜大風雨ニ會ス正成潛ニ城ヲ出
ヅ蔽之ヲ覺ラズ火起ルニ及ビ賊爭テ城ニ上ル
坑中ノ焚屍ヲ見テ以爲ラク正成既ニ死セリト

乃チ兵ヲ引テ東ニ去ル北條仲時湯淺定佛ヲ遣
シテ赤坂ヲ守ラシム然シテ正成ハ既ニ金剛山
ニ入レリ

正成金剛山ヲ守ル

正成金剛山ヲ守リ又出テ赤坂ヲ攻テ之ヲ拔キ
湯淺定佛ヲ降ス正成進テ天王寺ニ陣ス京師大
ニ震フ賊將北條仲時等來リ攻ム皆敗レ走ル護
良親王兵ヲ吉野ニ起シ赤松則村ヲシテ兵ヲ播
磨ニ起サシム以テ山陽山陰兩道ヲ絶ツ而シテ
正成金剛山ノ千窟城ニ遷リ別將ヲシテ赤坂ヲ

守ラシム。此ニ於テ。官軍復頼ル振フ。
賊大舉シテ金剛山及ビ吉野赤坂ヲ攻ム。既ニ
テ赤坂陷ル。二階堂貞藤吉野城ヲ陷ル。護良親王
高野山ニ走ル。是ニ於テ賊軍盡ク千窟一城ニ集
ル。兵八十萬ト號ス。正成千餘人ヲ以テ之ヲ拒
城。東西谷ニ臨之。南北金剛山ニ接シ。斷壁數千仞
賊衆ヲ恃之。四面薄リ攻ム。正成屢奇計ヲ出シ。賊
一萬餘人ヲ殺ス。賊懼テ敢テ薄リ攻メズ。諸道ノ
豪傑正成ノ風ヲ聞テ。並ビ起テ。官軍ニ應ズ。兵勢
大ニ振リ。賊益懼レ。相繼テ逃亡ス。

正成
賊以
奇策

新田義貞歸順ス

義貞ハ源義家十世ノ孫ナリ。世上野ノ新田郡ヲ
食ム。因テ以テ氏トス。初メ賊軍ニ從テ千窟ヲ攻
ム。竊ニ歸順ノ志ヲ懷ケリ。此ニ至テ。護良親王ノ
令音ヲ請フテ。疾ト詐リ。東ニ歸リ。日ニ宗族子弟
ヲ會シ。鎌倉ヲ攻メンコトヲ謀ル。而シテ高時未
ダ之ヲ覺ラズ。

高時天下勤王ノ兵益加ハルヲ見テ。謀ヲ行在ニ
通ズル者アルヲ慮リ。佐々木清高ニ命ジテ益守
備ヲ嚴ニセシム。清高ノ族義綱ナル者アリ。常ニ

歸順ノ志アリ。密ニ帝ヲ脱センコトヲ謀ル。帝之ヲ知リ侍女ヌシテ夜酒ヲ義綱ニ賜ヒ以テ之ヲ試ム。義綱因テ密ニ奏シテ曰。方今捕正成金剛山ニ據リ北條氏ノ大兵ニ抗ス。山陽南海ノ將士爭ヒ起ツテ正成ニ應ズ。是皇運興復ノ秋ナリ。上宜シク潛ニ出デ。出雲伯耆ノ間ニ幸ス可シト。帝大ニ喜ビ乃チ義綱ヲシテ先ヅ出雲ニ赴キ其族人ヲ帥ヒテ來リ迎ヘシム。既ニシテ義綱塩谷高貞ノ囚ヲル所トナル。久シテ歸ラズ帝乃チ意ヲ決シテ源忠顕ト謀リ夜潛ニ逃レテ和波港ヲ發

ス。清高追至ル。及バズ帝遂ニ伯耆ノ名和港ニ避シ。名和長年ニ依ル。

長年帝ノ船上山ニ奉ジ衆ヲ聚メテ守護ス。清高之ヲ聞テ兵三千ヲ帥ヒ來リ犯ス。長年撃テ大ニ之ヲ破ル。清高逃レ歸ル。是ニ於テ山陰山陽ノ豪族來リ鬻クル者太多シ。而シテ兒島高德モ亦兵ヲ帥ヒテ行在ニ至ル。兵勢大ニ振フ。三月赤松則村六波羅ノ兵ト戦ヒ累リニ之ヲ破ル。遂ニ長驅シテ京師ニ入ル。新帝新院之ヲ六波羅ニ避ク。帝乃チ源忠顕ヲ遣ハシ兵ヲ帥テ東

上ニ以テ則村ニ會セシム。高德等之ニ從フ。但馬ノ守護太田守延。恒良親王ヲ奉ジテ。忠顯ニ丹波ニ會ス。共ニ六波羅ヲ攻ム。利アラズ。守延戰死ス。忠顯親王ヲ奉ジテ男山ニ走ル。

足利尊氏歸順ス

高時。金剛山久シク拔ゲザルヲ以テ。足利尊氏。名越。高家ヲ遣シテ。六波羅ヲ援フ。高家。赤松則村ト山城ノ狐川ニ戰ヒ。敗死ス。尊氏軍ヲ還ス。尊氏ハ源義家ノ遠孫ナリ。世下野ノ足利郡ヲ食ム。故ニ以テ氏トス。初ム。尊氏每ニ北條氏ノ制スル所ト

足利尊氏ノ順

官軍京師ヲ復ス

ナルヲ憤ル。此ニ至テ。歸順ノ志アリ。遂ニ使ヲ行在ニ遣シテ。降ヲ請フ。帝素ヨリ其家聲ヲ聞ク。大ニ悦ビ。委スルニ討賊ノ事ヲ以テス。尊氏乃チ忠顯等ト共ニ。六波羅ヲ攻メテ。之ヲ拔ク。兩府帥。新主及ビニ上皇ヲ奉ジテ。東ニ走ル。二帥。途ニシテ官軍ノ殺ス所トナル。新主上皇皆還ル。官軍遂ニ京師ヲ復ス。此ニ於テ。金剛山ノ圍始テ解ク。帝議ヲ決シテ。關ニ復ラント欲シ。車駕。伯耆ヲ發ス。

北條氏亡ブ

義貞
義兵
ヲ擧

高時既ニ新田義貞ノ官軍ニ歸スルヲ知り。大ニ怒リ。令ヲ下シテ。新田氏ヲ撃タシム。義貞乃チ弟義助等ト。共ニ義兵ヲ擧グ。諸方ノ源氏相繼テ來リ會ス。武藏ニ至ル。此ホヒニ。兵二萬餘ニ及ビ。聲勢大ニ振フ。高時兵ヲ遣シテ來リ撃ツ。義貞迎ヘテ。大ニ武藏野ニ戰ヒ。之ヲ破ル。賊兵潰走シテ鎌倉ニ入ル。

義貞。三道ヨリ直ニ鎌倉ヲ攻ム。賊拒戰フ。義貞又之ヲ破リ。進テ府中ニ入ル。敵兵驚愕。赴キ距グヲ得ズ。諸軍繼ド進ミ。所在火ヲ放ツ。適風大ニ起リ。

北條
七條

煙焰空ノ蔽ル。府第悉ク焚ク。衆勢ニ乘ジテ掩撃シ。殺獲算ノシ。高時擧族自殺シ。北條氏亡グ。兵ヲ擧ゲシヨリ。此ニ至リテ。僅ニ十有五日。源賴朝府ヲ開トシヨリ。百七十餘年ニシテ。鎌倉亡グ。

義貞彼ノ馳セテ捷ヲ行在ニ報ズ。時ニ車駕播磨ニ至ル。關ヲ得テ。衆皆驩呼セザルコトナシ。楠正成兵ヲ帥セテ兵庫ニ迎ヘ謁ス。帝親カラズ。勞シテ曰。今日ノ事ハ。實ニ汝ノカナリ。正成拜謝シテ曰。陛下ノ威靈ニ賴ラズンバ。臣安ゾ重圍ヲ出テ。再ビ天顏ヲ仰グコトヲ得ンヤト。前驅シテ

京師ニ入ル車駕闕ニ還ル時ニ元弘三年ナリ。

菊池氏起ル

肥後ノ菊池武時少貳大友二氏ト官軍ニ應ゼン
コトヲ謀ル既ニシテ謀漏ル武時先ヅ發セシト
欲ス少貳大友應ゼズ武時怒リ乃チ自カラ百餘
騎ヲ以テ九州探題北條英時ヲ博多ニ攻テ之ヲ
破ル少貳大友却テ英時ニ降り來リ救フ武時終
ニ戰死ス

是ニ於テ官軍京師ヲ復ス少貳大友懼テ相謀リ
英時ノ攻メノヲ殺ス以テ復官軍ニ應ゼシコト

天下
略定ル

ヲ謀ル長門探題北條時直モ亦土居得能氏ノ敗
ル所トナリ遂ニ降ル此ニ至テ天下略定ル

中興ノ業衰フ

中興
ノ業

初メ尊氏護良ノ威名ヲ忌ミ竊ニ之ヲ除カンコ
トヲ圖リ深ク妃藤原氏ニ結ブ護良固ヨリ尊氏
ノ姦ヲ知り自カラ請フテ大將軍トナリ以テ尊
氏ヲ誅セント請フ帝憚バス勉メテ之ニ從ヒ拜
シテ征夷大將軍トシ封ズルニ北條泰家ノ邑ヲ

決斷
所ヲ

以テス而シテ尊氏ヲ誅スルヲ許サズ
決斷所ヲ置キ軍士ノ賞ヲ議ス權中納言藤原實

世ヲシテ之ヲ掌ラシム。時ニ將士闕下ニ集ル者。數萬人。切テ争テ決セズ。旬月ニシテ僅ニ十餘人ヲ定ム。又中納言藤原藤房ニ勅シテ之ヲ掌ラシム。藤房真偽ヲ分別シ。略條緒ニ就ク。而シテ内旨特ニ賞ヲ行フ。尤モ猥濫ナリ。藤房病ト稱ジテ出デズ。更ニ民部卿藤原光經ヲシテ代ハラシム。往々朝議ト内旨ト相抵牾ス。或ハ始メ賜テ後チ復之ヲ收ム。因テ綸旨翻覆ハ譏アリ。天下囂然トシテ。復武門ノ治ヲ思フ。

論旨

建武元年。大内ヲ營ス。盛ニ土木ヲ興シ。用度足ラズ。始メテ紙幣ヲ用ユ。是歲恒良親王ヲ立テ皇太子トス。

天馬

五月。出雲千里馬ヲ獻ズ。帝大ニ悦ビ。號ジテ天馬トス。此時ニ當リ。帝漸ク政ニ倦ミ。天馬ヲ得ルニ及デ。以テ祥瑞トス。一日。馬場殿ニ幸ス。藤原公賢ニ問テ曰。天馬ノ出ル其應如何ト。公賢遍ク故事ヲ引テ。以テ祥瑞ヲ贊ス。群臣皆賀ス。藤原藤房後レ至ル。帝亦問フ。對テ曰。天馬ハ平世ニ用ユル無シ。近日。賞罰當ヲ失シ。工役盛ニ興リ。文臣内ニ諛ヒ。武臣外ニ怨ム。而シテ姦雄隙ヲ伺フ。天馬ノ出

藤原
藤房
帝ヲ
諫ム

藤房
官ヲ
舎テ
去ル

護良
親王
談フニ
遺

諸將
功録

ル。焉ゾ亂兆ニ非ザルヲ知ンヤト。帝憚ラス。藤房
遂ニ官ヲ舎テ、遁レ去ル。帝驚テ之ヲ追ハシム。
及バス。其終ル所ヲ知ラス。

初ノ護良親王。尊氏ヲ除カント欲シ。密ニ令ヲ下
シテ。諸國ノ兵ヲ徵ス。尊氏之ヲ覺リ。誣奏シテ曰。
大將軍廢立ヲ謀ルト。妃藤原氏傍ヨリ之ヲ贊ス。
帝怒リ。護良ヲ執ヘテ。宮中ニ囚ヘ。其親臣三十餘
人ヲ誅ス。護良憤怒。書ヲ上リ。冤ヲ訴フ。有司畏憚
シテ。敢テ奏セズ。遂ニ護良ヲ鎌倉ニ徙ス。足利直
義。兵ヲ遣シ。衛護シ。窖ヲ穿テ。之ヲ幽ス。直義ハ尊

氏ノ弟ナリ。

諸將ノ功ヲ録シ。尊氏ヲ以テ。武藏常陸下總ノ守
護トシ。直義ヲ遠江。義貞ヲ上野播磨。正成ヲ攝津
河内。名和長年ヲ因幡伯耆ノ守護トス。帝京師ノ
復スルヲ以テ。尊氏ノ功トス。故ニ特ニ之ヲ重シ
ズ。赤松則村ノ播磨ノ守護ヲ奪ヒ。佐用莊ヲ給ス。
初メ。護良親王。則村ニ謂テ曰。汝功成ラハ。請フテ
備播兩國ノ守護トセント。妃藤原氏素ヨリ護良
ヲ嫉ム。是ニ至テ。遂ニ則村ヲ譖ス。故ニ之ニ及ベ
リ。則村怨望シ。後遂ニ叛ス。

皇朝各記

卷之三

三

尊氏叛ス

義親王殺ス

建武二年。北條時行。餘黨ヲ聚メテ。亂ヲ作ス。應ズル者甚ダ多シ。進テ鎌倉ヲ攻ム。足利直義。距ギ戰フテ敗績ス。直義。成良親王ヲ奉ジテ。西ニ走ル。護良親王ノ患ヲ爲サンコトヲ慮リ。人ヲシテ之ヲ宮中ニ殺サシム。足利尊氏。久シク異志ヲ蓄ヘ。常ニ時變ヲ窺ヒ。以テ志ヲ成ント欲ス。北條時行ノ鎌倉ヲ攻ムルヲ聞キ。往テ之ヲ伐ント請フ。之ヲ許ス。又征夷大將軍ニ任セシト請フ。許サズ。尊氏怒テ辭ヒズシテ

尊氏叛ス

發ス。是ニ於テ。諸武人職ヲ失フ者。争ヒ起テ之ニ從フ。直義ト合シテ。時行ヲ撃テ。之ヲ走ラス。遂ニ鎌倉ニ入ル。敕シテ師ヲ班サシム。尊氏詔ヲ奉ゼズ。

義貞命討テ

十月。尊氏自カラ征夷大將軍ト稱シ。鎌倉ニ據テ叛ス。關東ノ士。之ニ歸スル者甚ダ多シ。帝震怒。尊氏ノ官爵ヲ奪ヒ。新田義貞ニ節刀ヲ賜ヒ。兵六萬七千ヲ率ヒテ。之ヲ討セシム。源顯家。義良親王ヲ奉ジ。陸奥出羽ノ兵ヲ發シテ。諸軍ト會ス。義貞參河ノ矢野河ニ至ル。尊氏弟直義ヲ遣シ。義貞ヲ逆

一撃ツ直義敗レ歸ル。尊氏大ニ懼ル。

義貞直ニ進テ。伊豆府ニ至ル。軍ヲ顯メテ進マザルコト數日。賊軍復振フ。直義出テ、箱根ニ拒グ。義貞之ヲ攻メ。未ダ克タズ。義貞ノ弟義助。尊良親王ヲ奉ジテ。尊氏ト相摸ノ竹下ニ戰フテ敗績ス。大友負載。塩谷高貞。赤松則村等。賊ニ降ル。官軍大ニ潰ユ。義貞退テ尾張ニ陣ス。詔シテ義貞ヲ召還ス。義貞乃チ京師ニ歸ル。

尊氏子義詮ヲシテ鎌倉ヲ守ラシメ。自カラ軍ヲ帥ヒテ。義貞ヲ追ヒ。遂ニ京師ヲ犯ス。義貞等之ヲ

大渡山崎。宇治勢多ニ拒グ。大渡山崎ノ官軍敗走ス。宇都宮公綱。大友氏泰。尊氏ニ降ル。義貞走テ京師ニ還ル。帝叡山ニ幸ス。賊軍京師ヲ陷ル。楠正成。名和長年。俱ニ行在ニ赴ク。

是ヨリ先キ。源顯家。陸奥ヲ發シテ鎌倉ニ至ル。時ニ尊氏既ニ西ス。顯家乃チ尊氏ニ尾シテ。遂ニ叡山ニ至ル。諸將ト俱ニ。賊ヲ討テ大ニ之ヲ破ル。尊氏西ニ走ル。遂ニ京師ヲ復ス。顯家。義貞。正成等。尊氏ヲ追テ攝津ニ至リ。累戰之ヲ破ル。尊氏遂ニ西國ニ走ル。正成等。尊氏ヲ窮追セント欲ス。義貞遷

延決セズ。遂ニ兵ヲ引テ京師ニ還ル。時一延元元年ニシテ。紀元一千九百九十六年ナリ。

正成湊川ノ忠死

初メ、尊氏ノ西國ニ走ルヤ。盡ク九州ヲ從ヘシメ。遂ニ自カラ水師七千艘ヲ將ヒ。直義ヲシテ。步騎二十萬ヲ將ヒシメ。太宰府ヲ發シ。水陸並ニ進ム。義貞此ノ時兵庫ニ陣ス。書ヲ飛バシテ。急ヲ告グ。舉朝震駭ス。

乃チ楠正成ニ勅シテ。赴キ援ハシム。正成奏シテ曰。尊氏新ニ九國ノ兵ヲ擧テ來ル。其鋒甚ダ銳シ。

我疲兵ヲ以テ戰ハズ。敗ル、コト必セリ。臣謹テ計ルニ。陛下復叡山ニ幸シ。義貞ヲ召還シ。賊ヲシテ縱マ、ニ京師ニ入ラシメ。而シテ臣ハ河内ニ歸ル。糧道ヲ絶ン。則チ賊兵日ニ散ジ。我兵日ニ聚ラン。此ニ於テ。夾テ之ヲ攻メバ。必勝ノ策ナリ。臣思フニ。義貞ノ計モ。蓋亦此ノ如シ。但戰ハズシテ退クトキハ。顧テ物議ヲ慮ルノミ。戰道ハ一ニ非ラズ。勝ニ歸スルヲ要ス。伏シテ請フ。之ヲ再思セヨ。公卿皆之ヲ然リトス。獨リ藤原清忠不可ナリトシテ曰。賊衆ト雖。王師天命アリ。且ツ將帥

東上氏

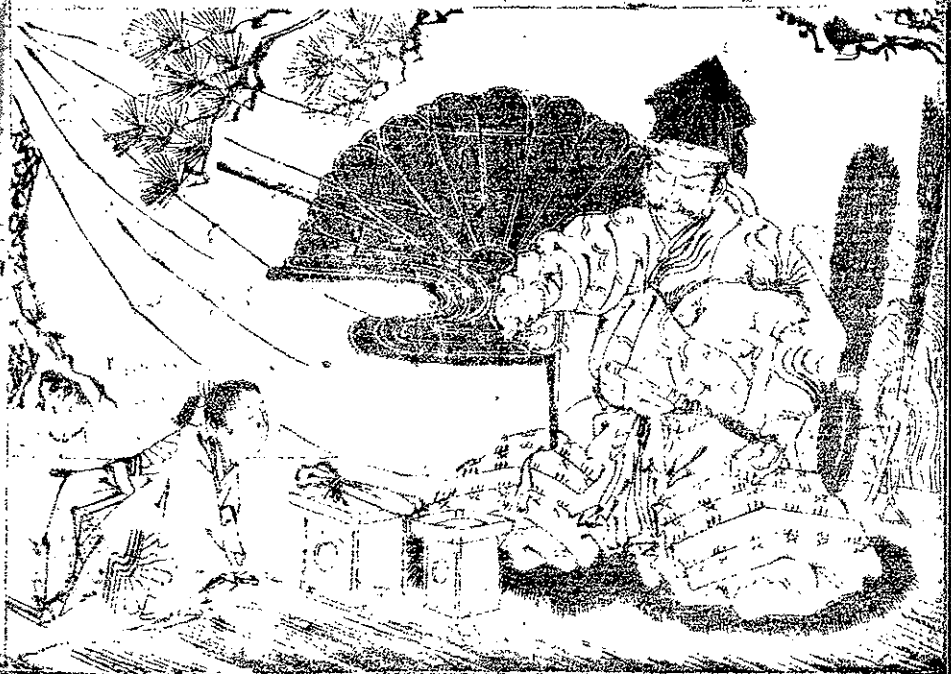
正成

清忠

外ニ在リテ。未ダ賊ト鋒ヲ接セズミテ退キ。墜下
邊ニ京師ヲ棄テバ。征討ノ將士。亦將ニ退志ヲ生
ゼントス。速ニ正成ヲ遣ハシ。戰ヲ外ニ決スベシ
ト。帝之ニ從フ。

正成乃チ弟正季。子正行ト共ニ辭シテ西ニ櫻井
驛ニ至ル。正成帝ノ賜ヲ所ノ刀ヲ正行ニ授ケ。遺
訓シテ河内ニ歸ラシム。正行時ニ年十一。
正成進テ兵庫ニ至リ。乃チ手兵七百ヲ以テ湊川
ニ陣シ。以テ直義ノ陸軍ニ當ル。義貞三萬騎ヲ以
テ和^{ワカ}田岬ニ陣シ。以テ尊氏ノ水軍ニ當ル。水軍ハ

先鋒和^{ワカ}田岬ヲ過テ東ス。
義貞軍ヲ抜キ。岸ニ沿フ
テ東ス。而シテ尊氏ノ全
軍ハ既ニ和^{ワカ}田岬ニ上ル。
正成腹背敵ヲ受ケ。乃チ
正季ト直ニ進テ直義ノ
軍ヲ突ク。賊軍披靡ス。殆
シ。直義ヲ獲ントス。尊
氏兵ヲ分テ。正成ノ後ヲ
包ム。正成乃チ馬ヲ回シ



忠臣
正成
死ス

シテ之ヲ撃ツ。益戰十六合。士卒多ク死ス。尚以テ
戰フベシ。而シテ正成生ルヲ欲セズ。乃チ走テ民
舎ニ入り。鎧ヲ釋キ。正季ニ謂テ曰。死シテ何ヲカ
為ント。正季曰。願ハ七タビ人間ニ生レテ國賊ヲ
滅サシ。正成欣然トシテ曰。然リト。遂ニ耦刺シテ
死ス。

尊氏直義軍ヲ併セテ。義貞ヲ追フ。義貞迎ヘテ生
田森ニ戰フ。利アラズ。殘兵ヲ以テ京師ニ還ル。上
下愕然。帝復叡山ニ幸ス。尊氏進テ京師ヲ陷ル。尊
氏東寺ニ據リ。法皇廢主ヲ男山ニ迎ヘ。兵ヲ遣シ

テ。行在ノ犯ル。義貞等撃テ之ヲ走ラス。乃チ進テ
東寺ヲ攻ム。官軍利アラズ。名和長年等之ニ死ス。
藤原師基北國ノ兵ヲ率ヒテ。行在ニ至ル。官軍又
振フ。

南北朝分立ス

足利尊氏後伏見ノ皇子豐仁ヲ立テ。帝ヲ京師ニ
稱セシム。是ヲ光明天皇トス。尊氏伴テ降ヲ乞ヒ
車駕關ニ還ラシコトヲ請フ。帝信シテ之ヲ聽ク。
義貞聞テ懾バス。帝義貞ヲ召シテ慰諭シ。詔シテ
皇太子ヲ奉ジ。北陸道ヲ經略セシム。義貞乃チ義

助等ト太子及ヒ皇子尊良ヲ奉ジテ北行ス。
車駕京師ニ還ル。尊氏帝ヲ華山院ニ幽ス。神器ヲ
新主ニ傳ヘニト請フ。帝乃チ偽器ヲ以テ之ニ授
ク。既ニシテ帝潛ニ華山院ヲ出テ吉野ニ幸シ。行
宮ヲ建ツ。此ヨリ吉野ヲ南朝ト謂ヒ京師ヲ北朝
ト謂フ。
楠正行帝ノ吉野ニ幸スルヲ聞キ馳テ之ニ赴ク。
四方將士相繼テ來リ集ル。官軍復振フ。適ニ義貞
ニ詔シテ興復ヲ圖メシム。義貞既ニ越前ニ至リ。
弟義顯ト共ニ皇太子ヲ奉ジテ金崎城ヲ守ル。賊

將軍高經等之ヲ攻ム。克クテ詔ニシテ詔書而
至ル。義貞大ニ喜バ

時ニ義助ノ子義治。杣山城ヲ守ル。瓜生保其弟。義
鑑之ヲ輔ケテ以テ北道ヲ扼守ス。足利高經兵
分テ之ヲ攻ム。保擊テ之ヲ走ラス。義治瓜生保等
伊賀守里見時成ト兵ヲ帥ヒテ金崎ヲ援フ。賊兵
逆ニ戰フ。官軍敗績ス。保義鑑等皆死ス。義治敗兵
ヲ收メテ杣山ニ歸ル。是ヨリ外援絶シ糧食竭キ
金崎益々苦シム。而シテ天時方ニ暖ニシテ雪消ス。
路通ニ敵兵日ニ城下ニ集ル。

卷之三十三
第六

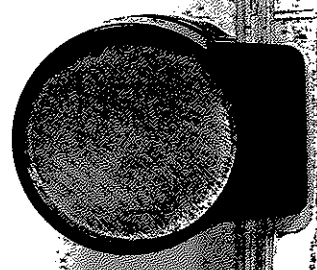
義貞助金崎ヲ援ハンコトヲ議ス既ニシテ金
崎陷ル義顯皇子尊良ト共ニ死ス皇太子逃
山ニ赴ク途ニシテ賊兵ニ獲テ京師ニ護送
セラル此時源頭家陸奥ニアリ義良親王ヲ奉
兵ヲ率ヒテ西上シ足利義詮ト利根川ニ戦フ
之ヲ破ル新田義興宇都宮公綱等亦上野ヨリ兵
ヲ帥ヒテ來リ會ス乃チ俱ニ進テ鎌倉ヲ攻メ之
ニ克ツ義詮出走ル義興ハ義貞ノ次子ナリ

義貞戰死ス

尊氏足利高經ヲ遣シ北陸ノ兵ヲ舉テ越前府ニ

據ル義貞攻テ之ヲ拔ク高經足利ニ走ル義貞乃
チ義助ト兵ヲ併セテ之ヲ攻ム高經藤島等ノ七
寨ヲ修メテ之ヲ守ル義貞兵ヲ分テ七寨ヲ攻ム
藤島ノ兵擾動ス官軍勢ニ乘ジテ之ヲ攻ム利
ヲズ義貞自カラ五十騎ヲ帥ヒテ間道ヨリ赴キ
援フ高經亦兵三百ヲ遣シ藤島ヲ援フ時ニ霧雨
昏濛兩軍適田中ニ相遇フ賊四面亂射ス義貞ノ
兵楯ヲ持ヒズ義貞急ニ馬ニ鞭チ圍ヲ突テ進ム
墜ヲ踰ユ馬躓キテ僵ル流矢義貞ノ眉間ニ中ル
義貞遂ニ自カラ刎ネテ死ス年三十八賊未ダ義

義貞
戰死



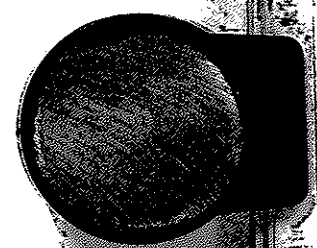
負ナルヲ知ラズ。屍ヲ檢シテ。錦囊書ヲ得タリ。其
辭ニ曰。討賊ノ事ハ。朕一ニ卿ヲ煩ハスト。始テ其
義負タルヲ知ル。義負既ニ死ス。義助敗兵ヲ收テ
國府ニ歸ル。是ヨリ。北國官軍振ハズ。是歲。北朝足
利尊氏ヲ以テ。征夷大將軍トス。時ニ延元三年ナ
リ。

後醍醐天皇崩ス

延元四年。後醍醐天皇吉野ノ行宮ニ崩ス。壽五十
二。帝天資英邁。博ク書史ニ通ズ。即位ノ初。銳意
治ヲ圖リ。親々テ廢政ヲ聽斷ス。元弘兵起ル。及

元弘。蒙塵數年。遂ニ大位ニ復ス。後古野ニ幸ス。終リ
ニ臨ミ。元兇未ダ殄ザルヲ以テ。恨トシ。遺詔シテ
賊ヲ討ヒシム。慷慨憂憤。劍ヲ按シテ崩ズ。皇太子
立ツ。是ヲ後村上天皇トス。遺詔ヲ四方ニ宣ヒテ
王ニ勤メシム。

是時ニ當リ。楠正行。和田正朝。兵ヲ率ヒテ行在ヲ
警衛ス。征東將軍宗良親王ハ。遠江ニアリ。征西將
軍懷良親王ハ。筑紫ニアリ。菊池武光之ヲ奉バ。鎮
守將軍源顯信。左近衛少將新田義宗。右兵衛佐
新田義興。其族江田大館。及ヒ土居得能ノ徒。並



州郡。據リ。恢復ヲ圖ル。

興國元年。脇屋義助。伊豫ニ赴キ。四國九州ノ軍ヲ督ス。伊豫ノ守護大館氏明及ヒ土居得能等。諸族大ニ聲勢ヲ得テ。官軍復頗ル振フ。五月。義東。疾テ卒ス。是ニ於テ。軍氣沮喪シ。諸城尋テ盡ク陷ル。是ヨリ後數年。四方勤王ノ師。益振ハズシテ。足利氏ノ霸業愈定マレリ。

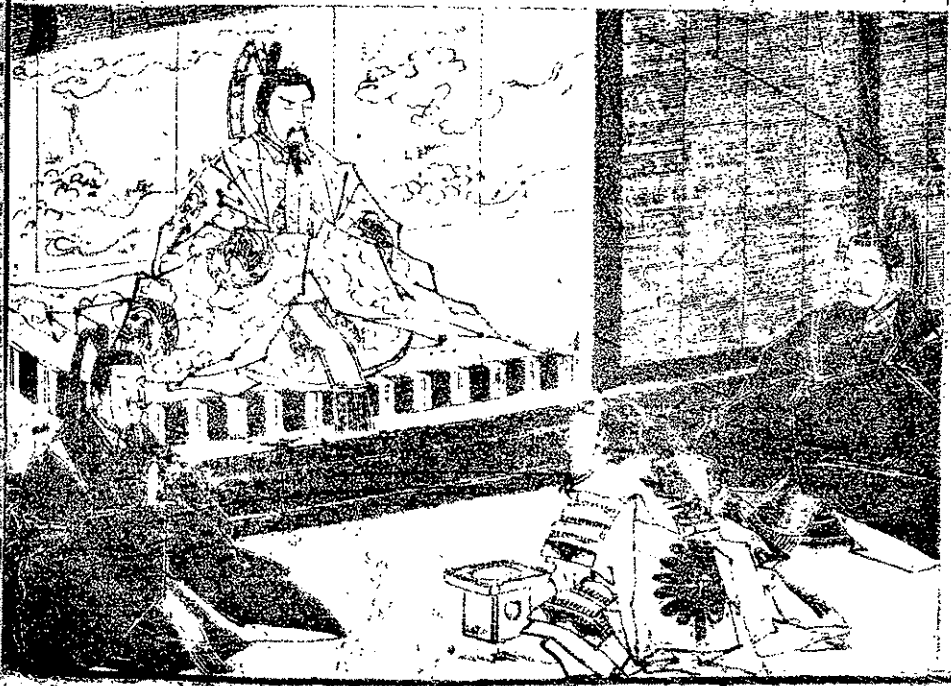
楠正行戦死ス

正平二年。楠正行。金剛山ヲ守ル。足利尊氏。其將。細川頭氏ヲ遣シ。兵三千ヲ帥ヒテ。來リ攻ム。金剛山

正行
破

ヲ距ル七里ニシテ舍入。正行ノ將ニ矢尾城ヲ攻ムニトスルヲ聞キ。其後ヲ斷ンコトヲ謀ル。正行之ヲ知リ。兵七百ヲ率ヒテ。矢尾ニ向ノマシ。火ヲ所在ニ放チ。潛ニ還リ。譽田林ニ蔽ハレテ陣ス。顯氏。矢尾ノ煙ヲ望ミ。急ニ馳テ。金剛山ニ赴ク。譽田ニ至リ。正行ノ兵大ニ呼テ突出ス。顯氏敗走ス。三年。賊將高師直。兵八萬ヲ帥ヒテ。將ニ行在ヲ犯サントス。正行之ヲ聞キ。行在ニ至リ。奏シ。請フテ。先臣正成。微カヲ展ベテ。強賊ヲ平ゲ。以テ宸喜ヲ蒙リ。天下再ビ亂レ。逆賊入寇スルニ及テ。終ニ

命ヲ湊川ニ致セリ。臣時
 年十一。命ジテ河内ニ
 歸ラシム。遺言スルニ。義
 旅ヲ收合シテ。國讐ヲ報
 復スルヲ以テス。今臣年
 既ニ壯ナリ。而シテ性尫
 弱。常ニ恐ル。且疾ニ嬰
 リ。遺命ニ負カンコトヲ
 今賊大舉來リ。犯ス。是臣
 命ヲ致ス。秋ナリ。伏シ



テ願クハ。言畢テ泣下レ。
 帝簾ノ揭テ正行ヲ視ル。慰諭シテ曰。近日ノ捷。大
 ニ賊ノ勢ヲ挫ク。朕太ク汝世ノ忠ヲ嘉ニス。今賊
 大舉シノ來ル。實ニ安危ノ決ナリ。然レドモ。兵ノ
 進退ハ。適宜ヲ得ルヲ要ク。朕汝ヲ以テ股肱トス。
 汝モ亦自愛セヨ。正行俯伏。涙ヲ垂テ出ツ。乃チ賊
 軍ヲ逆ニ撃テ。大ニ四條原ニ戰フ。晨ヨリ晡ニ至
 ル。正行箭ヲ被ケル。蝟毛。加ク。兵疲。用テ
 カラズ。正行弟正時ニ謂テ曰。賊ノ獲ル所トナル

皇朝略史 卷之四十一
 四十一

勿レト。乃チ相刺シテ斃ル。擧族皆死ス。賊軍進
行在ヲ犯ス。帝出テ宍生ニ幸ス。師直遂ニ行宮
火テ還ル。楠正儀兵ヲ聚シテ賊ト石川ニ相持ス
賊敢テ深ク入ラズ。正儀ハ正行ノ弟ナリ。是歳北
朝位ヲ皇子興仁ニ讓ル。是ヲ崇光大皇トス。

足利氏ノ内闕

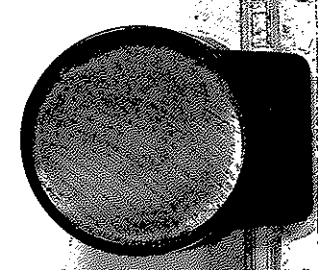
尊氏關東ヲ鎮ス

尊氏ノ弟直義初メヨリ尊氏ノ輔ウ。功多クシテ。
太ク權威アリ。而シテ高師直亦軍功多キヲ以テ。
幕府ノ執事トナリ。專横憚ル。トシ。遂ニ直義
ト隙ヲ生ズ。直義謀リテ師直ヲ殺サントク。直義

足利氏ノ

嘗テ尊氏ノ姪長子直冬ヲ養フテ子トス。是ニ於
テ出シテ中國探題トシ。以テ外援トス。既ニシテ
謀泄ル。師直弟師泰ト。兵ヲ帥ヒテ京師ニ入り。直
義ヲ任ケシコトヲ諳フ。尊氏之ニ從フ。直義屏居
シ。遂ニ薙髮シテ。世ニ用ユルノ意ナキヲ示ス。而
シテ潛ニ大和ニ走リ。上書シテ歸順ヲ請フ。之ヲ
許ス。因テ命ジテ尊氏ヲ討セシム。時ニ正平五立
ナリ。

明年尊氏直義ト攝津、御影濱ニ戰フ。敗走ス。
遂ニ和ヲ議ス。尊氏京師ニ還ル。直義往テ之ニ會



高師直師泰髮ヲ剃シ出テ降ル。途ニシテ殺サ
ル。直義尊氏ト外和シテ内諧ハズ。既ニシテ直義
復遂ニ越前ニ走ル。尊氏兵ヲ將テ之ヲ討ス。直義
遂ニ鎌倉ニ走ル。尊氏復往テ之ヲ撃ント欲シ。官
軍ノ其後ヲ襲ハンコトヲ恐ル。乃チ使テ吉野ニ
遣シ。降ヲ請フ。帝伴テ之ヲ許ス。因テ詔シテ直義
ヲ討セシム。尊氏乃チ兵ヲ發シテ直義ヲ討ス。連
戦之ヲ破ル。直義降ル。尊氏之ヲ毒殺ス。尊氏留テ
關東ヲ鎮ス。
尊氏ノ關東ニ在ルヤ。新田義宗新田義興等兵ヲ

起シテ武藏ニ至リ。尊氏ト戦フテ之ヲ破ル。尊氏
更ニ兵八萬ヲ以テ來リ。義宗拒キ戦フテ敗
ラシ。越後ニ走ル。義興信濃ニ走ル。八州ノ將士盡
ク尊氏ニ從フ。後義興復兵ヲ武藏上野ニ興ス。勢
頗ル振フ。賊將伴リテ欵ヲ納ル。義興ヲ誘殺ス。

男山ノ行在

天皇尊氏東下ノ虚ニ乘ジ。親征シテ男山ニ至ル。
楠正儀等ヲシテ。兵ヲ帥ヒテ京師ニ入ラシム。細
川顕氏等ト戦フテ。之ヲ破ル。義詮近江ニ走ル。敕
シテ北朝ノ三主ヲ取テ。之ヲ男山ノ行在ニ致シ。

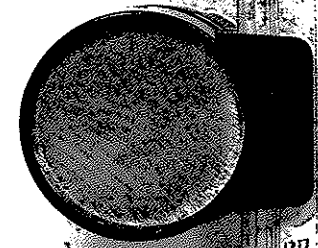
男山ノ行在

遂ニ宍生ニ幽ス。既ニシテ。義詮進テ東山ニ據ル。官軍之ヲ攻ム。利アラズ。退テ男山ヲ保ツ。義詮復京師ニ入ル。進デ男山ヲ犯ス。時ニ楠正儀河内ニ還リテ。兵ヲ募リ。未ダ歸ラズ。是ヲ以テ官軍振ハス。賊勢益銳シ。帝親カヲ甲又擐キ。馬ニ御シ圍ヲ潰シテ南ニ出ヅ。賊之ヲ追フコト太々急リ。權大納言藤原隆資之ニ死ス。左兵衛督藤原康長力戰ク。帝吉野ノ行宮ニ達スルヲ得タリ。義詮崇光帝ノ弟。瀧仁親王ヲ立テ。帝ヲ稱ヒシム。是ヲ後光嚴帝トス。尊氏京師ニ還ル。

南北朝合一

正平二十三年。後村上天皇崩ス。皇太子立ツ。是ヲ長慶天皇トス。既ニシテ位ノ皇太弟ニ讓ル。是ヲ後龜山天皇トス。北朝ニ於テハ。嚮ニ尊氏既ニ薨シテ。子義詮繼テテ大將軍トナル。此ノ時ニ當リ。官軍ノ諸將前後ニ大抵死歿スト雖。九州ニ於テハ。菊池武光。懷良親王ヲ奉ジテ。賊將少貳頼尚等ヲ破リ。近畿ニ在テハ。楠正儀等。賊將佐々木秀詮ヲ破リ。東西ノ官軍頗ル振フ。武光卒シテ。子武政。孫武朝。相繼モ屢

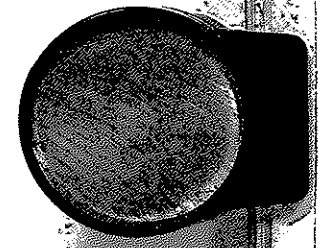
皇朝本紀卷之四十一 四十一



賊軍ヲ破リシガ。後武朝大ニ大内義弘ヲ破ル所
ト爲リテヨリ。九州ノ官軍遂ニ衰ス。
近畿及關東ニ於テハ。賊兵屢官軍ヲ破リ。賊勢東
西ニ振ニ。近畿諸國皆其略有スル所ト爲リ。南朝
ニ屬スルハ。獨吉野ト及ビ楠氏ノ族ノ守ル所
金剛山トアルノミ。
北朝ノ後光嚴帝。嚮ニ位ヲ皇太子ニ讓ル。是ヲ後
圓融帝トス。既ニシテ又位ヲ皇太子ニ讓ル。是ヲ
後小松帝トス。而シテ義詮モ亦薨シテ。子義滿繼
ギテ大將軍トナル。義滿英明ニシテ大變アリ。細

川賴之ヲ以テ其管領トナス。賴之ハト爲リ忠厚
ニシテ學ヲ好ミ。義滿ヲ輔佐シテ治績大ニ著ハ
義滿富山義深ヲ遣シテ。金剛山ヲ攻メ之ヲ陷ル
楠氏亡バ。初ニ正成ノ此ニ城キシヨリ。此ニ至ル
マテ。凡ソ六十年。義滿遂ニ人ヲ吉野ノ行在ニ遣
シ。和ヲ請フテ日車駕京師ニ還リ。神器ヲ北朝ニ
授ケバ。兩統更立ノ例ノ如クセント。帝之ヲ許シ
京師ニ還棄シ。乃カ父子ノ禮ヲ以テ。神器ヲ北朝
ノ後小松帝ニ授ケテ。位ヲ讓ル。後醍醐天皇吉野

神後器
小松授



南北
一合

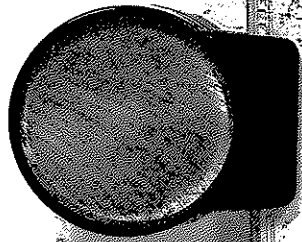
遷幸セシヨリ。南北分立スルコト凡ソ五十七
年。此ニ至リテ復一統ス。時ニ元中九年紀元二千
〇五十二年ナリ。

白雲朝略史卷三終

天皇世系表

世代	謚	即位	在位年數	壽	年	號
第十	後鳥羽	紀元千八百四十六年	十四	六十	文治 建久	建久 建仁
第九	上御門	同千八百六十年	十二	三十七	正治 承久	建永 建仁
第八	順德	同千八百七十二	十一	四十六	建曆 承久	建保
第七	仲恭	同千八百八十二年	一	十七	承久	
第六	後堀河	同千八百八十三年	十一	二十三	貞應 安貞	元仁 嘉祿 貞永 嘉祿
第五	四條	同千八百九十三年	十	十二	天福 曆仁	文曆 嘉祿 延應 仁治
第四	後嵯峨	同千九百三年	四	五十三	寬元	
第三	後深草	同千九百七年	十三	六十二	寶治 正嘉	建長 正元 康元

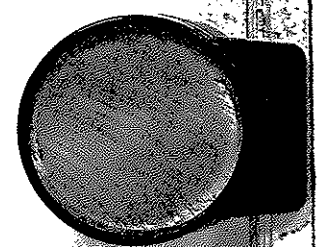
皇明略史 卷之三



第十	第九	第八	第七	第六	第五	第四	第三	第二	第一	第十
九	九	八	七	六	五	四	三	二	一	九
後龜山	長慶	後村上	後醍醐	花園	後一條	後伏見	伏見	後宇多	龜山	龜山
同二千二十九年	不詳	同二千	同千九百七十九年	同千九百六十八年	同千九百六十二年	同千九百五十九年	同千九百四十八年	同千九百三十五年	同千九百二十年	同千九百二十年
二十四	不詳	二十九	二十一	十一	六	三	十一	十三	十五	十五
壽闕	不詳	四十二	五十二	五十二	二十四	四十九	五十三	五十八	五十七	五十七
建德 弘和 文中 天授		興國 正平	元應 元亨 正中 嘉曆 元德 元弘 建武 延元	延慶 正和 德長 文保	乾元 德治 嘉元	正安	正應 永仁	建治 弘安	文應 文永	弘長

北	朝				
光嚴	崇光	後光嚴	後圓融		
五十二	六十	六十五	三十七	三十六	
止慶	建武 曆應 貞和 康永	貞和 觀應 貞治 延文 應和	應安 永和 康曆 永德 至德 嘉慶 康應 明德		

皇明各代



問題

幕府ノ創立ハ何人ヨリナルヤ

頼朝ノ置キタル公文所問注所ノ職掌ヲ問フ

頼朝ノ人ト爲リハ何如

頼朝ノ義經ニ於ケル所爲ノ大略ハ何如

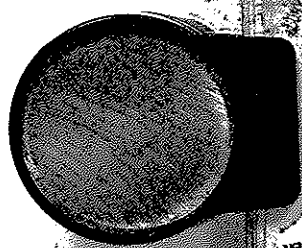
大權ノ武門ニ歸シタル所以ハ何如

頼朝ノ富上野ノ狩リニ何ナル變ノ起リシヤ

其始末ハ何如

頼朝ノ歿後北條氏執權ニ移ルノ景況ハ何如

公曉ガ實朝ヲ弑シタルノ始末ヲ問フ



兼久ノ亂ノ原因ハ何如

北條氏ノ執權ハ何代ナリシヤ

北條時頼ノ人ト爲リテ問フ

蒙古來寇ノ本末ハ何如

佛教ノ大ニ興リタル景況ヲ問フ

武門ノ政治ノ主意ハ何如

北條氏ノ世々守リタル眼目ハ何如

北條氏ノ時風俗何如

後醍醐帝北條氏ヲ亡ボク前後ノ事態ヲ問フ

後醍醐帝ノ楠氏ヲ得ルトキノ景況ハ何如

兒島高德勤王ノ事迹ヲ問フ

正成赤坂城守ノ大略ハ何如

正成金剛山ヲ守リタルトキノ狀ハ何如

新田義貞歸順ノ狀ヲ問フ

北條高時ヲ攻メタルハ何人ナリシヤ

足利尊氏ノ歸順シタルトキノ狀ハ何如

後醍醐帝中興ノ業衰フルノ原因ハ何如

藤原藤房ノ略傳ヲ問フ

尊氏始テ叛ヒシトキノ景況ハ何如

正成湊川忠死ノ情況ノ大略ヲ問フ

南北朝分立スルノ原因ヲ問ノ
義貞戦死ノ始末ハ何如
四條暇ノ戦ノ概略ヲ擧ゲヨ
南北朝合一スル所以ハ何如

社会科

明治二十年上月七日版権免許
同二十一年三月十九日印刷
同二十一年三月三十日出版
同二十一年八月十七日印刷
同二十一年八月十九日訂正出版

一上下定價金十二錢宛
二上下同 金十三錢宛
三上下同 金十四錢宛

福岡縣福岡市博愛中島四丁目番地

發行兼
印刷人

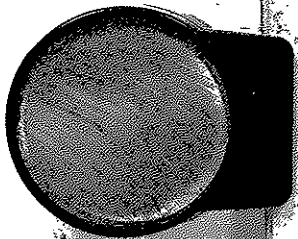
林 芥 介

同縣福岡市福岡東職人の町廿九番地

著作者

笠間益三

月刊





山治
68
木村